

華やかさの陰には目立たないけれどもそれを支える多くの人の力がある。観客数一〇万人を超える富士総合火力演習においてもその成功のために、縁の下の力持ちの役割を担う多くの隊員がいる。その隊員達にスポットライトを当てたい。一年に一回でも良い、全ての隊員諸官をヒーローやヒロインにしてやりたい。

[総火演については、富士紀行11号参照](#)

① 散水隊員の涙ぐましき努力

総火演会場の畑岡地区やそれに至る場内道路等は未舗装であり、車両の移動やヘリのダウンウオッシュで埃が巻き上がり、部隊の視界を遮り、観客に不快感を与える。これが為、散水部隊が大活躍だ。除洗車を始めレンタルした散水車数台を含み十台の散水車がお客さんが帰った後、晴天が予想される時など丑三つ時の二時に起床、三時頃から散水を開始する。

水を使いすぎて駐屯地の井戸が枯れそうになったこともあるとか。

② 停弾堤整備隊員の夜を徹しての整備

戦車や無反動砲等は停弾堤に設けられた目標に射撃する。何れの部隊も正確迅速な射撃であり、間違いなく、一撃で的を破壊し停弾堤部を崩す。崩れた停弾堤部を翌朝までに補修しなければ訓練も出来ない、また、演習にも差し支える。停弾堤補修は基本的に人力であり、仕上げには、演習場整備装置一号（ザウルス；形が恐竜に似ていることから命名）とか言う特別製の土羽打ち器材で、上辺部から叩いて締める。これが、大変だ。まず、足が鈍い。作業場所までの進入・離脱に五〇分を要するため実 作業時間はごく僅からしい。遅くとも、試射開始までに作業を終わらせなければならない。停弾堤整備部隊は的的设置補修の任務をも有している。出しっぱなしの的は 問題はないが、隠頭（出たり隠れたりする）する或移動的は大変だ。種を明かす訳にはいかないが、如何にして 射撃に吻合した的のリモートコントロールをするか、特に破片等から防護するにはどうすべきか部隊挙げて脳症を搾っているようだが（金を 掛ければ色々あろうが、・・・）、これぞと言うものはない。



ザウルスの写真

③ 胃に穴が穿く気象幹部

総火演の時期は台風シーズンであり、且つ東富士演習場畑岡地区は、朝霧が出やすく、

また山の気象でもあり変化が激しく、正確に予報することは難しい。目標の見え具合によって火砲等毎に射撃の可否を決定しなければならず、雷の場合には観客の安全をも考慮する必要もあり、気象幹部の責務は極めて重い。今回は五味一尉と言う女性幹部自衛官で、総火演支援は初とかで、胃に穴の穿く思いをしている。気象レーダーを駆使しての予報もピッタリという訳には行かない。自然相手は大変だ。彼女の晴れ晴れした顔を見たいものだ。

#### ④ 整備用部品の緊急輸送と夜通しの整備

総火演に参加する火砲・車両は事前訓練を含めると相当な期間過酷な条件下で運用される。常時良好な状態に維持するため、経験値等に基づき所要の整備用部品を保有しているけれども、時には、思いも掛けない部品が入用となる。富士地区に在庫がない場合等は、直ちに補給処まで受領に行かねばならぬ。一刻も早い調達のため、へりを準備している。整備担任の課長等は、何も惹起しいようにと祈るような気持ちで常時監視、不具合発生に応じ直に対応、部隊からは「基準砲だから、小隊長車だから何とかして欲しい」との悲痛な要望もあり、時には夜通しで整備をせざるを得ない。部隊の要求が色々と変わることも珍しくない。変更に応じ朝までには要求を満足させることがサービス部隊の使命だ。御苦労様。

#### ⑤ 学校教官も列兵として獅子奮迅の活躍

富士学校長が担任官である総火演、正に総力戦である。3佐や1尉という幹部・陸曹教官諸官の手も借りなくては任務を達成出来ない。それが実態だ。自分は3佐だ、中隊長をも終えた者だ、それを交通統制や会場整理に運用するなどのもつての他だとの非難をも甘受しなければならない。富士学校教官が実施する交通統制、会場整理、接遇・案内、駐車場勤務、警備・安全は流石ひと味違う仕事っぷりである。模範的ですからある。端末の隊員の思いを中堅時に再確認することも意味あるではなかろうか。

されど、副担任官としては心から感謝する。今回は、普・特・機各部か120名にのぼる教官が参加している。これら教官を含み、普・特・機各部からは、総計200名余が参加している。

#### ⑥ のど飴舐めつつナレーター

今年は、女性隊員2名、男性隊員4名のナレーターが大活躍だ。原稿チェック、状況に応ずるナレーション、聞き取りやすく、明瞭な口調、彼・彼女らはナレーションの正規の訓練を受けたことがある者もいるとは言え、素人であることは事実だ。風や雑音を拾わないように密閉された放送ボックスはさながら蒸し風呂だ。汗だくになりつつ、そして口中が乾くと声もかすれるので、水分補給が大変だ。時には原稿が変わることもあるが、その時など細心の注意が必要だ。修正前の内容を記憶しているので、ついポロッと行ってしまふこともある。彼等は、色々な工夫をしている。イントネーションや強弱、息継ぎを独特な符号で原稿に記入しているとも聞いた。後段演習を担当する場合は、迫力を出すために語尾を上げたり、トーンを変化させてもいる。そして、彼等が何よりも気を使っているのが健康管理だ。体調を崩すと口調にも変化が生じるし、聴衆にも聞き取りにくくなる。声が命の仕事だから、喉の調子を最善の状態に維持することが大変だ。毎日、毎日あれだけのナレーションをしているのだから、相当に酷使されている。声が嘎れてはならない。喉飴を舐めつつかどうかは知らないが、重任なるが故に苦労も耐えないようだ。更には、時には寝言を言って奥さんに笑われることもあるとか。